
赤毛のアンを読みたくて

紀ノ川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤毛のアンを読みたくて

【Nコード】

N3274U

【作者名】

紀ノ川

【あらすじ】

小学6年生の山田花子は「赤毛のアン」が真っ白になっている事に気がきました！これは大変です！花子は「赤毛のアン」を誰もが読めるように、本の世界に飛び込みました！

おはなし・その1

小学6年生の山田花子はカップラーメンにお湯を注ぎ、フタをしました。そうして目覚まし時計を3分間にセットしました。こうしておけば本を読んでいても、カップラーメンを忘れる事はありません。

花子は小学校の図書室で借りてきた「赤毛のアン」をまた読もうとしていました。花子は「赤毛のアン」が大好きなものでした。もう何度も読んだのですが、何度読んでもおもしろくておもしろくて飽きないのです。

本を開いた花子は驚きました！なんと本の途中から最後まで、ページが真っ白なのです！

「これはアン・シャーリーの身に、何か大変な事が起こったに違いないわ！」ウラと言う名前の少女が叫びました！ウラは花子の側にいつも一緒に居る少女です。花子も同感でした。

こうして花子は早速「赤毛のアン」の世界に飛び込みました！

おはなし・その2

「赤毛のアン」は第31章からページが真っ白になっていました。アンがグリーン・ゲイブルスに引き取られてから3年後、クイーン学院の受験を1年後に控えた夏休みの部分です。

「赤毛のアン」を何度も読んでいる花子にはわかるのです。

けれども「赤毛のアン」の世界に飛び込んだ花子は、アヴォンリィの世界の美しさにすっかり心を奪われてしまい、アンをそっこのけで「恋人の小径」や「妖精の泉」、「ウィローミア」や「ヴィクトリア島」を心ゆくまで散歩して楽しんでしまいました。

おはなし・その3

そうしてようやく花子はアンに会う事が出来ました。

アンはグリーン・ゲイブルス（緑の切妻屋根）の前に立っていました。

花子はアンにききました。

「どうして本が真っ白になったの？」

アンは答えました。

「あたし疲れ切ったの。少女から大人になるのがイヤになったの。あたしいつまでもこのままここで遊んでいたい」

花子は驚きました！

「そんな事したら、世界中の女の子が「赤毛のアン」を読めなくなるわ！お願いだから元気を出して！」

「クイーン学院へ行くのは素晴らしい事よ。だけどマシユウ小父さんが死んでしまったり、マリラの目が悪くなってしまうのには耐えられないわ。あたしはいつまでもマシユウ小父さんとマリラに囲まれてグリーン・ゲイブルスで暮りたいの」

アンはグリーン・ゲイブルスを愛しそうに見ました。

「ねえ、それより、せっかく花子はこの世界に来たんだから、あたしと一緒に遊ばない？あたしたち腹心の友になれるわ！すぐにダイアナがやって来るし、ジェーン・アンドリユースやルビー・ギリスもやって来るわ。あたし、花子をみんなに紹介するわ！みんなで大いに愉快地楽しみましょうよ！」

おはなし・その4

そこへステイシー先生が現れました。

ステイシー先生は言いました。

「あれは本物のアンじゃないわ」

そこへアラン夫人も現れました。

アラン夫人は言いました。

「あれは花子さんの側にいつも一緒に居る少女・ウラよ」

そうです！花子がアヴォンリーの世界の美しさにすっかり心を奪われてしまい、心ゆくまで散歩して楽しんでいる間に、花子の側にいつも一緒に居る少女・ウラがアンに化けていたのです。

おはなし・その5

花子は叫びました。

「あたしはだまされないわ！あんたはアンじゃないわ！ウラよ！」
ウラは言いました。

「アンとウラは一心同体なのよ。花子とウラがそうであるよにね。アンや花子だけじゃないわ、世界中の女の子がウラと一心同体なのよ。生と死、光と影、明と暗がそうであるようにね。アンが疲れ切ったのも花子が願ったからなのよ？ここは花子が願った世界なのよ？」

花子は叫びました。

「あたしはこんな世界は願っていないわ！」

「ウソばかり！本当はどうなの？花子はチビでデブでブスでアトピーでお父さんも居ないじゃないの。学校でもいじめられて。そんな花子に私の事をとかく言う資格があるの？花子のお母さんも昔は「赤毛のアン」を読んでいたのよ？花子より熱心なぐらいにね。それが今じゃどう？スーパーにフルタイムのパートで雇われて、一日中レジ打ちで疲れ切っているじゃないの？「赤毛のアン」をいくら読んでも何の役にも立たないのよ！花子のお母さんも地元の大学を出て、希望に満ちたまなざしで東京の会社に就職したけれど、そこでどんな目にあったか教えてあげましょうか？どうして花子にはお父さんが居ないのか？どうして花子のお母さんは、東京から地元

に帰って来て、独りで花子を産んだのか？それを知ったら花子は驚くわよ？」

「どうしてウラがそんな事を知っているのよ?!」

「世界中の女の子が「赤毛のアン」を夢中で読むけれど、その時「赤毛のアン」もまた世界中の女の子の心を夢中で読んでいるのよ。自慢じゃないけれど「赤毛のアン」は世界的なベストセラーよ。日本中どこの本屋にも置いてあるわ。私は東京の本屋から花子のお母さんをじつと見ていたのよ」

ウラは勝ち誇った様子で繰り返しました。

「「赤毛のアン」をいくら読んでも何の役にも立たないのよ！」

ステイシー先生とアラン夫人が花子の肩にそれぞれ手をかけ、身をかめながら花子の耳元で「ウラに負けてはいけないわ」とささやいて花子を励ましました。

花子は叫びました。

「そんな事ないわ！だって「赤毛のアン」が教えてくれたんですもの！人生は戦うだけの価値があるものだって！そしてその戦いはとても楽しいものだって！」

ウラは突然、無表情になりました。そして、

「ひとつだけ忠告しておくわ。表の面積が増すと裏の面積も増すのよ」

それだけ言うとうらは霧散消失してしまいました。

おはなし・その6

アラン夫人が言いました。

「花子さん、よくがんばりましたね。私達も花子さんと同じ年にウラと戦ったのよ。いいえ、今でもウラと戦っています」

ステイシー先生が言いました。

「さあ、花子さんが会いたかった人が来ますよ」

花子がステイシー先生の指差した方を見るとアンが歩いてくるではありませんか！今度こそ本物のアン・シャーリーです！花子はずいぶん飛び上がって喜んでしまいました。と同時にステイシー先生とアラン夫人は消えて居なくなりました。花子のピンチを助ける役目を終えたのです。

アンは歩いて花子の目の前まで来ると言いました。

「あたし「お化けの森」を通り抜けようとしたんだけど、いくら歩いても同じ所をグルグル回って「お化けの森」から抜け出せなかったの。しまいには疲れ切って眠ってしまったの。だけど誰かがあたしを呼ぶ声が聴こえたから、目をつぶってその声だけを頼りに、声のする方へ、声のする方へと歩いたの。そうしたら「お化けの森」を抜け出せたの」

花子は笑顔で応えました。そしてアンに話し掛けようとしたその瞬間、空から降って来るような物凄い音量で、突然ベルが鳴り出しました！

おはなし・その7

花子は驚いて机から体を起こしました。そしてあわてて目覚まし時計のベルを止めました。

花子はひどくお腹が空いていたので、大急ぎで湯気の立つアツアツのカップラーメンを食べはじめました。

カップラーメンを食べている最中に、花子のお母さんが仕事から帰ってきました。そして花子の側に置いてある「赤毛のアン」を見つけると、

「うわ〜なつかしいわね！「赤毛のアン」ね？この本、お母さんも花子ぐらいの年によく読んだのよ」と言いました。

花子は思わず「知ってるよ」と答えそうになりましたが、カップ

ラーメンの汁と一緒にゴクリと飲み込んで黙っていました。

花子のお母さんは「赤毛のアン」を手に取り、なつかしそうに赤ちゃんをペラペラと眺めていました。

花子の活躍のおかげで世界中の女の子がまた「赤毛のアン」を読めるようになったのです！

花子のお母さんは「赤毛のアン」から顔を上げると「いつも忙しくてカップラーメンばかりで悪かったわね。これからはお母さんが出来るだけ食事をつくるからね」と言いました。

花子は笑顔で「うん！」と返事をしました

おはなし・その8

花子は部屋に戻ると、大事そうに「赤毛のアン」の表紙をながめました。

花子は今度の休みにお母さんと一緒に「赤毛のアン」を読む約束をしたのです。

花子と花子のお母さんは声をそろえて言いました。

「赤毛のアンを読みたくて」

（おしまい 最終更新日11年08月12日）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3274u/>

赤毛のアンを読みたくて

2011年8月14日07時05分発行